

企業開発部で様々な買収案件を手掛けたが、課長としては悩みが尽きなかった。

開発第一課長になったのは一九九〇年二月、三十五歳の時だった。七八年入社組が本社のライン課長に昇進するのは序列でいうとその翌年からだから、いわゆる「第一選抜」に入った。

企業開発部の担当を経て当時は専務になっていた石原弘康さんの推挙があったと言われたものだ。

企業の合併・買収(M&A)の仕事は楽しかったが、本社内の人間関係にはうんざりした。七人ほどの部下の中には年上の人もいる。会議で課の方針を決めても思うようには動いてくれない。以前は仕事で実績を上げれば、部内で一目置かれたが、課長になるとそうはいかなくなっていた。

創徳企業情報社長
宇都宮 徳治氏

二度とないドラマ ⑩

部内には「なぜあの若造が課長になったのか。営業をやらせておけばいい」と公然と言つ人もいた。おかげで一時は課が廃止されて班別組織になり、部下なしの部付課長になったこともある。私の力が足りなかったのだろうが、とにかく目立たないように心がけなければならなかった。

「法人の山一」で花形だった事業法人部との確執も頭痛の種だった。事法マンは担当企業が厳密に決めら

部内には「なぜあの若造が課長になったのか。営業をやらせておけばいい」と公然と言つ人もいた。おかげで一時は課が廃止されて班別組織になり、部下なしの部付課長になったこともある。私の力が足りなかったのだろうが、とにかく目立たないように心がけなければならなかった。

「法人の山一」で花形だった事業法人部との確執も頭痛の種だった。事法マンは担当企業が厳密に決めら

社内の摩擦に悩みも

れば、しがらみとおさらばし、実力主義

込んでしまえばいい」などという声すら漏れてくる。内向きで組織の利害にこだわる山一の弱さを目の当たりにする思いだった。

そんな折、宇都宮氏は一本の電話を受けた。「米国系の証券会社

社が近く日本に会社を設立します。あなたにぜひお越し願

企業開発部があった旧山一証券本社(1990年当時)



仕事人

